

フェミニズムと現代女性文学

— 映像から考える桐野夏生の『魂^{たま}萌え！』 —

金子 幸代

プロローグ

桐野夏生は、金沢市生まれの現代を代表する女性作家の一人である。その活躍の幅は広く、二九二ページの資料一の年譜にあるように、二〇〇四年には『O・U・T』（英語版）で日本人としては初めてアメリカのエドガー賞候補にもなっている。『魂萌え！』は、二〇〇四年一月五日から二月二八日にわたり「毎日新聞」に連載された桐野の最初の新聞小説である。その後、単行本として二〇〇五年四月に毎日新聞社から出版され、第五回婦人公論賞を受賞した。新潮文庫では上下巻という長編だが、二〇〇九年一月現在、二〇万部増刷されている。作品の反響は大きく、二〇〇六年一月には岩波書店から、本岡典子著『魂萌え！の女たち―祝祭の季節を生きる』というヒロインと同年齢の団塊の世代の女性たちを取材したルポルタージュも出版されている。またNHK総合テレビでは二〇〇六年一〇月二一日から一月四日まで三回にわたり放送され、第二四回ATP賞テレビグランプリ二〇〇七のドラマ部門最優秀賞を受賞した。さらに二〇〇七年一月には、坂本順治脚本・監督により映画化され、第一九回東京国際映画祭コンペティション部門に出品された話題作である。そのため二九一ページの関連文献一覧に示したように各誌がこぞって作者のインタビュー記事を掲載しており、作者自身による執筆の経緯も語られているので取り上げてみたい。

タイトルの「魂萌え！」は桐野の造語¹であり、「！」マークを付けたタイトルは新聞小説史上初めてのことだった。「肉体は衰えても魂は燃えている、老いの世代の小説」を書こうと考えていた時に「キャラ萌え」といった言葉が流行っていたので、「魂」という抽象的な言葉に「萌え」を重ねたのだが落ち着きが悪く、「！」マークを付けることにしたという。作者の桐野自身が「読者が毎日共感をもって引き込まれるような作品にしたかったし、何より人間が年をとるということに関して私自身が、あくまでポジティブに考えている」²と述べているように、『魂萌えー』は五九歳の主婦という団塊の世代がヒロインに据えられており、美や若さが称揚される現代日本社会における固定したヒロイン像の型を壊す新しい女性像が造詣されている。

これまで『グロテスク』や『O・U・T』など女性の闇を描いてきた桐野がなぜ「老い」をテーマにした作品を描いたのだろうか。二つの理由があげられる。第一の理由は桐野の母親が六四歳で寡婦になるという体験があったことによる。

もしかしたら、歳をとるということは、意外と荒々しく、積極的にになれるものなのかもしれない、と思いました。六〇代の女性たちの第二の青春みたいな、本当に吹っ切れて、失うものはないという、そういう強さを書こうかな、と。ですからぎっかけとしては、うちの母のことが頭にありましたね。

(引用の傍線は筆者、以下同じ)

七四歳で亡くなった母が「こんな幸せな一〇年間はなかった」と晩年を振り返っていたことを人づてに聞いて、「想像をはるかに超えた人生や考え方があろう、それを描いてみたい」と考えていたのだ。

第二の理由として新聞小説であったことがあげられる。

もう一つの理由は、連載媒体が新聞だったということ。新聞は毎日読むものだから、いつもの私の作品のように、ダークな雰囲気や漂う作品はそぐわないのではないかと思っただけです。尖ったものよりも、すっと心に入るものが良い。なるべく日常的な内容にして、共感を得たかったです。「連載時は読まなくても、本になった時に売れば良い」という考え方もあるかもしれませんが

せんが、新聞は、連載小説のスペースを裂くために、かなりの数のニュースが落ちます。そのことを考えると「読まれなくてもいい」とは決して思えませんでした。プロの作家として、広く読者の興味をひきつけ、続きが気になるような小説を書きたかったのです。新聞の良いところは、「反響がすぐに来ることです。主人公の敏子と同世代もしくは少し上の年齢の女性読者から、お便りをたくさんいただきました。」遺産のことは譲っては駄目。しっかりと敏子さん！」とか、あるいは「自分も同じ体験をした。夫の死後に愛人がいたことがわかって苦しんだ」などというものです。自分のことに引きつけて読んでくれた方が多かったです。

関口敏子は夫・隆之が三年前に定年を迎え、夫婦ふたりの穏やかな日々を送っていた。しかし、脱衣場で夫が心筋梗塞で倒れたため、人生が急変する。葬儀の日になくなった携帯電話に夫の浮気相手である伊藤昭子から電話がかかる。夫の会社の社員食堂の栄養士で、現在は蕎麦屋を営んでいる伊藤昭子と死の当日も逢瀬を重ねていたのである。平凡だが幸せな家庭を築いてきたと信じていたのに夫は愛人がいたことを知り、敏子は動揺する。八年ぶりにアメリカから帰国した長男に強引に同居を迫られても拒否できずにふりまわされるばかりである。息子との遺産相続をめぐる言い争いに敏子はついに家出を決行する。

世間知らずで、お人好しの敏子には有難いことに、敏子さんシツカリ！と連載中も叱咤激励を多数いただいた。私の母が寡婦になつたころを重ねたこともあって、私自身愛情をもって書いています。

夫の動向に関心がなかった専業主婦、家族は家族として無意識に生きてきた敏子を、甘いなどと誰が非難できるだろうと私は思う。人間ってそんな単純なものではないはずだし、貞淑な妻、平凡なサラリーマンといった記号や類型で括りきれないわけでもない。あるとき優しいと感じた人が次の瞬間牙を剥いたり、不倫には寛容な人が環境問題となると妙に潔癖だとか、その逆だとか、その局面、局面で人が見せる顔は違うもの。敏子も夫の死後、平凡な主婦という記号からはみ出した自分に驚き、悩みますが、それもたまたまの契機になっただけのことで、彼女の内側にだって、誰の内面にだって、知らない顔はある。

新聞連載時から読者は、敏子とともに夫の裏切りや身勝手な子どもたちの言動に憤る。矢継ぎ早に迫ってくる騒動、孤独や老後の不安に敏子は立ち向かわざる得ない状況におかれ、ようやく自分自身に目覚め始める。そうした敏子の奮闘に読者は共感し、自己の思いを重ねていた。桐野がこの作品を書いたのは、「敏子のような物語」を自分でも読んでみたかったからだと述べている。「平凡な主婦」という「記号」を象徴する敏子という名前や同級生の女友達の榮子や和世、夫の浮気相手の昭子といった平凡すぎる名前についても桐野が昭和一九年から二〇年生まれの人たちの名前を意識してつけたからだ³。

一 ドラマ化

行き場のない敏子がカプセルホテルで身寄りのない「風呂ばあさん」と呼ばれる宮里と知り合い、老女の「不幸な半生」を聞き、一万円を払わせられる。敏子が「私が一番怖いのは歳を取ることです。歳を取ってどういうことですか」と尋ねるが、宮里は「ま、人間なるようになるわよ」とはぐらかされてしまう。この場面について桐野は次のように述べている⁴。

自分で書いたのに、この場面を読む度に笑ってしまう。ここは、敏子の最大の恐怖は「孤独と老い」であり、そのふたつに対処する方法なんてない、とする宮里の明快な結論があるのだが、本当にその通りだと思っ自分があるからだ。

敏子は五十九歳で寡婦となったが、亡夫との思い出は悔いだらけ。災害でもないのだから前もって備えることなんかできないのに、さあこれから自分の老いを考えましよう、と突然言われても、戸惑うばかりだ。つまり、不意にやってきた不幸は、すべての答えを早く、しかも自分だけで考えろ、と最も難しい問いを敏子に投げかけることになったのだ。結論など簡単に出るはずはない。悟れるはずなんてない。結論がころころ変わったっていいじゃないか。思いつきり感って、深刻な問題ははぐらかして生きていく。『魂萌え！』を書いた背景には、そんな宮里的な「いい加減な気持ち」があつたのである。「ま、人間なるようになるわよ」としか言えないことって、きつとたくさんあるのだ。

NHKエンタープライズ、エグゼクティブプロデューサーの岩谷可奈子は、『魂燃え！』を初めて読んだ時に「なんてリアルなんだろう」と思ったという。世の中に「敏子さん」は大勢いるに違いない。その「ゴマン」という敏子さんたち」を応援したいとドラマの統括製作にあたった⁵⁾。

主役に据えた高畑淳子はTVドラマ初主演だったが振幅の大きな敏子の心の揺れを見事に体現し、ドラマ部門最優秀賞作品になった。長年の女友達で未亡人の栄子に歌手の小柳ルミ子、セレクトショップを経営する和世に仁科亜希子、主婦の美奈子に木野花の三人の衣装が三様でトーンも異なり、「この四人の友人関係が続いているのも変よね」と笑いながら収録が進められた。この微妙な違和感こそが、このドラマを制作する上でのテーマであり、「人間は思っていることを心の底に押し隠しながら生きています。長年連れ添ってきた夫婦の間にも、大人になつた子供たちとの間にも、高校時代からつきあってきた同級生同士も、心に本音をためこみながら関係が続いていつているものではないでしょうか。言葉と本音のくい違い」がドラマの醍醐味だと述べている。

夫の愛人昭子には高橋恵子が扮し、二人が対峙する場面は緊張感がみなぎる。十年の間も関係が続いていた事実を昭子から告げられ、敏子は愕然とする。定年後の趣味として蕎麦打ち教室に毎週通っていたのも口実であったのだ。夫の裏切りを知り、怒りにかられた敏子が夫の着ていた服を片端からごみ袋にいれ、泣き崩れる。その取り乱した敏子を見て驚くのが原作では長女だが、ドラマでは野田という霊園の宣伝マンに設定されているのが大きな変換である。息子と娘の家をめぐる争いから居た堪れず家出をする。行き場のない敏子はデパートの屋上で女性専用のカプセルホテルの看板を見つけ、泊まることにする。だまされたことがわかって、夫はもはやこの世になく、何もできない。悔しさに大声で泣く敏子。カプセルホテルの従業員も兼ねる野田から注意され、再会に驚く二人。野田はカプセルホテルに住む「風呂ばあさん」こと宮里の甥だったのだ。甥の保証人になったために破産し、夫も死に残された宮里は自殺を図るのだか、それを救ったのが野田になっている点も原作との大きな違いである。さらに敏子が夫の蕎麦打ち仲間、塚本との交際に終止符を打つのが、妻から塚本の携帯に電話がかかってくることに由来するというのも原作と異なる。このようにドラマでは敏子と塚本との結び付きは弱まっているが、その分野野田の比重が重くなっている。ホテルの風呂場で脳梗塞で倒れ入院した宮里を捨てて夜逃げすること

になる野田だが、「欠けたところのない人はない」という境地にいたる敏子の導き手になっている。すなわち野田は、敏子の心の闇を垣間見、敏子の女性性を引き出す重要な役割が担わされているのである。

NHKドラマの最終回では、昭子と敏子との対決の場面が中心に据えられている。「音楽も会話の行間をあぶりだすようなスパニッシュ・ギターのオリジナル。そして最重要なのは、その矛盾を体現する主人公です。高畑淳子さんは凄まじい振れ幅のキャラクターを、演技力の豊かさ、深さで、繊細に大胆に演じてくださっています。魅力的な共演陣ともヒリヒリした場面が続き、クライマックスには高橋恵子さんとの一〇分以上に及ぶ『静かなる決闘』を置いた」と、演出を担当した吉川邦夫（NHKエンタープライズ エグゼクティブ・ディレクター）が述べている。がしかし、静かなる決闘の後に訪れる二人のその後にこそこのドラマの本当の眼目がある。夫のゴルフ会員権を取り戻すために訪れた昭子の蕎麦屋で壊した花瓶の弁償金として二五〇万円の請求書が敏子のもと届く。その請求書の後を追うように昭子が再び敏子のもとを訪れ、請求書を返してほしいと迫る。すなわち、対決は三回用意されていたのだ。しかし、三回目の昭子にはもはや戦意はない。悩みに悩み、焦燥しきった昭子の顔から逆に夫・隆之への思いの深さが伝わってくる。敏子は霊園の場所を昭子に教える。ドラマでは、敏子が前日に昭子が訪れたであろう手向けられた花を見つける墓参りのシーンで終わる。夫をめぐって争っていた敏子の最後の心の変容にこそドラマの主眼がある。一方、映画版ではそれにとどまらず、原作にも書かれていなかった敏子のその後の生き方に踏み込んでいる。

二 映画化

映画版を担当した監督の坂本順治は「今まで避けてきたというか、関心が持てなかった普通の主婦」と家庭のドラマが持っている、その普通さに惹かれ、女性の脚本家を起用するという提案を断って自らが脚本も書き上げた。「今回は、（敏子が）自分の家のドアを開けて、靴を脱いで三和土にあがって、スリッパへと履き換えるといった日常的な立ち振る舞いが演出のキモになると思った。台詞に關しては原作という信頼できるバイブルがあるので、いかにそれを語ってもらうか。お皿をどう洗って置くかとか、ゴミをいかに分別

するかという姿やたずまいを自然に写したかった」とその苦心を語っている⁷。

桐野は坂本順治が映画化の打ち合わせの際の質問に興味を持ったという。「敏子」という人は、新聞を三面から読む人ですか、一面から読む人ですか。私は、三面から読む人だと思う、と答えました。阪本さんは、演出の参考になさると仰っていましたが、私はそこまで考えていらっしやるのか、だとしたら、脚本を読んだだけでは、どういう演出で、どんな映画になるのか分からないと思いました。だから、すごく楽しみでした」と⁸。

阪本さんが、原作と違うものにしよう、違うものにしようと工夫なさったので、とても面白くなったと思います。小説の表現と映画の表現は違います。小説の中で描いたりアリティが、映画になるとすごく凡庸になったり、或いは映画で成り立つアリティが小説では不自然になったりします。私は小説の換骨奪胎はまったくかまわないと思っっているんです。映画では敏子さんが映写技師になって『ひまわり』（七〇／ヴィットリオ・デ・シーカ）が出てきますね。もしあれを小説でやるとすごく嘘っぽくなると思うんですよ。

でも映画だと、すんなりと映画への愛みたいなのが伝わってきて、あの場面では涙が出そうになりましたね。阪本さんは、敏子さんの芯みいたいなものを的確に捕まえて、映画的に表現なさっている。ですから自分の原作というよりも、映画そのものを楽しみました。

映画版の魅力はいみじくも桐野が述べているように、長編小説とは違って映画でしか味わえない良さがある。敏子を演じた風吹ジュンはほとんど素顔で出演した。対する昭子を演じた三田佳子は白髪まじりの断髪、喪服でも情熱的な真つ赤なベディキュアをしていて対照的である。二人の最初の対決が原作以上に鮮烈なのは、黒いストッキングから透ける昭子の真つ赤なベディキュアはもろんのこと、化粧気のない敏子が昭子の訪問に口紅をつけて出迎える、一瞬の場面転換で変わる唇の赤さが映像ならではの効果を上げているからである。次の対決では敵陣の蕎麦屋に乗り込む敏子が化粧をしているのに対し、昭子の足にはベディキュアはない。素足にサンダル

という変わりようは、夫・隆之を失った喪失感がいかに深いものであつたかを物語っている。クライマックスは、敏子を家具にたとえるところである。「家具みたいなもんだって言っていたわ。結婚当初に買った、時代遅れだけど、取り替えるのも面倒くさいからそこに置いて使っている家具って」と昭子に言われた敏子は、「取り替えたいのなら、取り替えればいいのよ。面倒だったのでしょう、関口も。あなたのような、新しいだけか古いんだかわからない家具に取り替えるのが。きつとたいして変わらなれないと思つたのよ」と応酬する。結局、夫は敏子に母性を、昭子に娼婦性を求め、そのどちらも手放せなかつたのだ。男のズルさがあぶりだされている。思えば、男のエゴイズムに振り回された二人だったが、この世にいない男をめぐる争いの無意味さを聞い果てに知る仕組みになつていて。浮気相手の昭子は敏子のもうひとつの姿でもあつたらう。二人の対決は勝負が反転するオセロゲームのようであり、二人がまさに鏡像であつたことを意味している。

カプセルホテルの「風呂ばあさん」になる宮里（加藤治子）の身の上も決して特殊な例ではない。夫を亡くし、生活の糧を失い、家を追われたもうひとりの敏子である。一方、女友達でもうひとりの未亡人である栄子（今陽子）もまた、孤独を抱え、ホセ・カレーラスを追いかけるもうひとりの敏子といえるだろう。ドラマと違い、映画では高校時代からの仲良し四人組も夫のいる組と未亡人組とはもはや理解しあえない溝があることが明かされる。旧友たちとは会えば食事を共にするが、グチを言えば慰めあうカタルシスは訪れない。むしろ栄子のグチは、和世（由紀さおり）によって一蹴されてしまうのである¹⁰。和世が栄子の言動に「私六十になるのやだ」と不満を口にする。怒つて席を立つた栄子を追いかけるがつかまえられなかつた美奈子（藤田弓子）が「なんだかさあ、これわそうじやない私ら」と崩壊寸前の四人の不安定な関係を語る。これまで見ようとしなかつた四人の綻びが楽しいはずの食事の場面でかえつて顕わになるのである。

しかし、そうした中でも敏子は少しずつ自分の足で歩き始める。古いフライパンを捨て新しいものに買い換えたり、自分自身の携帯電話を持ち、新たに手帳を買い、自分のためのスケジュールを書き込む。家族を優先していた敏子にとつてささやかだが確かな変化の一步である。自分のために生きようと一步踏み出す。一人で焼肉店で食事をし、ビールを飲み、酔つ払つた勢いで踏み出せなかつた映画技師の教えを請いに行く場面、とりわけ印象的なのは酔つ払つて電車の中で吐いてしまう場面である。唇についた汚れを拳でぬぐい

「世の中」とつぶやく、暗闇を見つめる敏子の顔が電車の窓ガラスにくつきりと映し出される。自分自身の力で世間の荒波に漕ぎ出そうとする敏子の思いが込められており、観客の心を打つシーンである。

桐野は、「私の小説を読み慣れた読者には、物足りない」と映ったり、毒が足りない、という意見もあったようです。でも、私自身は、とても怖い話だと思いつながら書きました。主人公の『敏子』は、信じていた人間関係の劇的変化という大事件に遭遇しますが、対応するのは自分一人だけなのです。つまり、人間関係というものは、相手が亡くなっても存続していくものなのだ、と思いました。なのに、負わねばならないのは、生きている人だけ。しかも、それが重過ぎるのです。だから、『魂萌え！』は、解放もなければ成長もない人間関係、という落とし穴にはまり込んだ主婦の物語とも言えましょう。」と述べているのだが、『魂萌え！』が救いがあるのは敏子自身が「人間関係、という落とし穴にはまり込んだ」ことがわかるにつれ、そこからもぎながら這い出していこうとする作品だからである。原作で書かれていない映画での創作部分が付け加えられた理由もそこにある。なお、映画版に挿入されたヴィットリオ・デ・シカルの『ひまわり』は、戦争により帰らぬ夫を探し求めてロシアまでやってきた妻が、別の所帯を夫が持っていたことを知り、別れを決意するという話である。二度と会うことができない夫を見送るソフィア・ローレンの瞳が万感胸に迫る。『ひまわり』を挿入したのは単なる名作だということだけでなく、男をめぐる三角関係が『魂萌え！』の構図と重なるからであろう。しかし、敏子は夫をめぐる渦の中にとどまってははいない。長年住みなれた家を売り、一人で生活するためにマンションに引っ越すことにする。映写技師として働き始めた敏子の顔からは当初の不安そうなおびえは消え、念願の仕事を開始できたという静かな自負と希望がある。長いトンネルを抜けた先に見える明るさがラストにある。

以上のように、映画版では原作で書かれなかった昭子との対決の後に訪れる敏子の旅立ちに力点が置かれている。それまでの葛藤を潜り抜け、紆余曲折を経て映写技師として働き始めた敏子の満ち足りた顔がクローズアップされて幕となる。敏子はこれまでのように夫がいなくても変わらぬ日常を生きているのではなく、夢の実現に向けて新たな旅立ちを始める。敏子の一步一步が観客の心をとらえるのである。映画『魂萌え！』は、小説の書かなかった敏子のその後として映写技師になり、『ひまわり』を上映する場面で終わる。それはまさにこの小説の持つ可能性を具現したものと言えるだろう。いわば家を出た『人形の家』のノラのその後を描き、作品解釈の新たな

な方向性を示したものになっている。

エピソード

『魂萌えー』の九章「手帳の余白」で、蕎麦打ち仲間の塚本から「僕にとってあなたは、やはり慎ましやかな奥さん、イメージなんだな。僕はそこに惹かれてるんです。エブロンが似合って、自信がなさそうに見える、でも、心の中には激しいものも溢れている。その落差が可愛い」と、男が作り上げた貞淑で可憐な妻像を押し付けられるとはつきりとノーを敏子は言う。「塚本さんは、私がつつましい奥さんだから誘ったんですか。私は変わりたいんですよ。このままじゃいけないと思ってるんですよ」と叫ぶ。この変化への思いは『魂萌えー』の重要なキーワードである。

文庫版の解説を担当した星野智幸¹²⁾は、「自分の抱いている違和感（差異）を自分で言葉にできたとき、初めて自意識が生じ、表現することが可能になる。正確に内面を語ることで、敏子は自我を獲得した」と指摘しているように、夫が亡くなる以前の敏子には、自分の生活を表現する必要などないと思っていた。だから、夫の急死によってそれまで置かれていた現実がむきだしになった時、どう受けとめたらいいのか自分に説明できず、とまどい混乱することになる。説明するための「言葉」を持っていないからだ。

「違う、自分を責めていることを言いたいんじゃないんです」と敏子は思わず声を張り上げてから、店が静まり返っているのに気づき、慌てて声を潜めた。「正直に言うと、あまり責めてはいなかったように思います。私は、関口を段々と信頼できなくなっていた。それが一番辛いのに、関口はそれを不満だなんて、つまらない言葉に置き換えた。それが一番嫌だったんです」

敏子は最終章の十二章「燃えよ魂、風よ吹け」の中ではじめて夫が亡くなった時の違和感を「言葉」にして明示する。作品の前半が主として敏子のモノロークであったのに対し、後半になると対話が増え、最後にいたって同級生や蕎麦打ち仲間ら大勢の前で自己の思

いを「言葉」に出して表現する。一見、何の変哲もない人生を送ってきた女性が、煩わしいしがらみを振り切って、自分自身のために羽搏こうとする際の「言葉」を獲得する過程が「私は変わりたいんです」に端的に現れている。妻でもない母でもない一人の人間として、新たな人生を切り開く決意を固めていく過程での敏子の「言葉」獲得の物語は、さわやかな読後感を提示している。夫へのこだわりを捨て自らの生き方を模索しようとするドラマ版や映写技師として働く映画版、二つの異なる映像化が成功しているのは原作の内包している作品世界の豊かさ故と言えよう。

最後に桐野がインタビュー¹³に答えて、女性に向けてのメッセージを贈っているので引用してこの稿を終わりたい。

なかなか難しい、とは思いますが他人と比べないことです。私たちはひとりひとりが違う生を生きているのだから、自分の人生を他人と比べるなんて虚しい。自分なりの目標を立て、己を磨くことを心がければ、割と幸福になれる気がします。そのためには仕事は続けた方がいい。仕事は自分を磨くだけでなく、時には孤独を癒してくれます。それに、経済的に自立しなければ、自由にはなれません¹⁴。

怖じずに自分の欲しいものを求めていけばいいと思います。家族、友達などの人間関係にしても仕事でやりたいことにしても、どんなに欲深くなっても、全てを手に入れられるわけではない。ならばいつそのこと、もっと欲しいものは欲しいと意識して欲深に生きたらいいと思います。

『魂萌え！』はまさに自立しようとする多くの女性たちへの応援歌になっている。気づくのに遅すぎることはない。世間のしがらみに縛られずに自由に羽ばたきなさい、あなた自身のかけがえのない人生だから。

注

- 1 「特集 桐野夏生」(『文藝』四七巻一号、二〇〇八・二)の桐野夏生自身による「著作解題」の中で「初めての新聞連載小説です。毎日、手に取って読まれる日刊紙の小説の題材は、どんなものが合うだろうと考えた結果、どこにでもいそうな主婦の物語を選びました」と述べている。
- 2 「インタビューBOOKS」(『日経ビジネスAssocié』二〇〇五・七)で、桐野は五九歳の寡婦をリアルに描く『しよばぎ』こそ面白」と述べている。ちなみにペンネームの桐野は司馬遼太郎『翔ぶが如く』の桐野利秋から、夏生は大庭みな子『浦島草』から見つけたものである。
- 3 NHKで二〇〇六年一〇月にドラマ化された際の桐野夏生の解説(同左)。
- 4 http://www.nhk.or.jp/drama/archives/tanamee/html_tama_midkoro.htmlより。
- 5 注5に同じ。
- 6 注5に同じ。
- 7 「インタビュー 坂本順治監督」(『キネマ旬報』一四七六号 二〇〇七・二)
- 8 「FRONT INTERVIEW No.126 桐野夏生／北川れい子」(『キネマ旬報』一四七六号 二〇〇七・二)
- 9 リュース・イリガライ『ひとつでない女の性』(勁草書房 一九八七・五)
- 10 「作品評 女たちの心はアクションに満ち満ちている」(『キネマ旬報』一四七六号 二〇〇七・二)
- 11 注1に同じ。
- 12 星野智幸は、「私には、『魂萌え!』以後の敏子は、『ブラック桐野ワールド』の入り口に立ったと映る。『これからは、今までしたことのない経験をたくさんしよう』と欲望する敏子の身の上に、仮に『ブラック桐野ワールド』で起こるような事件が降りかかってきたとしたら、敏子は自らを凶器として社会を突破しようとするだろう。還暦目前の人間がそのような境地に達したことに、私は広大な普遍性を感じて涙ぐんでしまう」と述べているが、むしろ『魂萌え!』では「ブラック桐野ワールド」の女性たちとは異なる新たなヒロイン像が造詣されていると言えよう。
- 13 注2に同じ。
- 14 桐野夏生「ダサイこともしましょうよ」(『現代』二〇〇八・二)においても、定年後「誰にも依存せずに自らの足で立つ」ことの重要性を説いている。

付記 本稿は、イタリア・レッツェ大学で開催された二〇〇八年度ヨーロッパ日本研究者会議(EASJ)における「桐野夏生と現代日本」のパネリストとして行なった研究発表をもとに加筆したものである。

資料一

桐野夏生略年譜

〔「自筆年譜」をもとに筆者が加筆作成〕

- 一九五一年（昭和二六年） 金沢市生まれ。（兄と弟の三人兄弟）。
一九五四年（昭和二九年） 建設会社に勤務する父の転勤に伴い、仙台市に移る。
一九五八年（昭和三三年） 東北大学附属小学校に入学。
一九五九年（昭和三四年） 札幌市立幌南小学校に転校。
一九六四年（昭和三九年） 三月 同校卒業、四月 札幌市立伏見中学校に入学。
一九六五年（昭和四〇年） 父の転勤に伴い、武蔵野市立第四中学校に転校。
一九六六年（昭和四二年） 三月 同校を卒業。四月 桐朋女子高等学校入学。
一九七〇年（昭和四五年） 三月 同校を卒業。四月 成蹊大学法学部入学。
一九七四年（昭和四九年） 三月 同大学卒業。 岩波ホールに就職（七五年まで勤務）。
一九七五年（昭和五〇年） 医薬品関係の出版社に就職、雑誌・パンフレットを編集（七七年まで勤務）。
一九七六年（昭和五一年） 二五歳で結婚。
一九七八年（昭和五三年） 一年間専業主婦となるも退屈で自分のお金がないことに不自由を感じる。
一九七九年（昭和五四年） 〃八〇年（昭和五五年） シナリオ学校に通いながら、マーケティング・リサーチ会社のフリースタッフになる。
一九八二年（昭和五七年） 長女を出産。
一九八三年（昭和五八年） 小説を書き始め、ライターとして赤ちゃん雑誌、看護師専門誌などで記事を執筆するようになる。
一九八四年（昭和五九年） サンリオロマンス賞佳作入選。
一九八六年（昭和六一年） 「ロマンス小説」の依頼が増え、原作者としてレディース・コミック界の女王・森園みるくとコンビを組み活躍する。

- 一九八八年（昭和六三年） 「すばる」新人賞応募作品が最終候補に残る。
- 一九九三年（平成五年） 『顔に降りかかる雨』で第三九回江戸川乱歩賞を受賞。
- 一九九八年（平成一〇年） 『OUT』で第五一回日本推理作家協会賞を受賞し、単行本は三三万部。
- 一九九九年（平成一一年） 『柔らかな頬』で第一二一回直木賞を受賞。
- 二〇〇三年（平成一五年） 『グロテスク』で第三二回泉鏡花文学賞を受賞。
- 二〇〇四年（平成一六年） 『OUT』（英語版）で日本人としては初めてアメリカのエドガー賞 (Mystery Writers of America Edgar Allan Poe Award) 候補に。『残虐記』で第一七回柴田錬三郎賞を受賞。
- 『魂萌え！』を毎日新聞に連載。
- 二〇〇五年（平成一七年） 『魂萌え！』で第五回婦人公論賞を受賞。
- 二〇〇七年（平成一九年） アメリカで『グロテスク』出版。
- 『メタボラ』を朝日新聞に連載。
- 二〇〇八年（平成二〇年） 新潮社より『東京島』刊行。

『魂萌え！』関連文献一覧

- ・「現代の主役 作家桐野夏生」（『潮』二〇〇五・四）
- ・「文春図書館特別対談 桐野夏生×角田光代しよぼさのなかに真実はある」（『週刊文春』四七（一八）（通号一三三二六）二〇〇五・五）
- ・「インタビュー BOOKS」（『日経ビジネスAssocié』四（一五）（通号六九）二〇〇五・七）
- ・「POST BOOK WONDER LAND 著者に訊け！」（『週刊ポスト』三七（二六）（通号一八一二）二〇〇五・七）
- ・田中和生「崩壊の向こう側の母性―桐野夏生『魂萌え！』とリリー・フランキー『東京タワー』をめぐって」（『小説trapper』二〇〇五（秋季））

- ・桐野夏生・風吹ジュン「魂萌え！ 対談」（婦人公論）九二（三）、二〇〇七・一）
- ・「FRONT INTERVIEW No.126 桐野夏生／北川れい子」（キネマ旬報）一四七六号、二〇〇七・二）
- ・「作品特集 魂萌え！」（キネマ旬報）一四七六号、二〇〇七・二）
インタビュー
- 桐野夏生「年をとることで荒々しくなる。それがひとつのテーマ」
- 坂本順治監督「異国に不法入国していた気分かな」
- 風吹ジュン「この映画は、ブルースです」
- 三田佳子「昭子の存在自体がサスペンスだと」
- 「作品評 女たちの心はアクションに満ち満ちている」
- ・「特集 桐野夏生」（『文藝』四七（一）、二〇〇八・二）
- 「桐野夏生自身による著作解題」
- 「桐野夏生連続ロング・インタヴュー」
- 「自筆年譜」
- ・桐野夏生「ダサイことかもしれませんよ」（『現代』四二（二）、二〇〇八・二）

